

第34回（令和3年度）

「国際交流・国際理解のための小中学生による作文コンクール」

## 優 秀 作 品 集



令和4年1月

公益財団法人小佐野記念財団

## ■ 目 次 ■

### 最優秀賞

- 中学生の部** 題名「東京五輪の裏側で・・・」  
甲府市立南西中学校 2年 清水 美遥……………2

### 優秀賞

- 中学生の部** 題名「みんなでより良い世界をつくる」  
北杜市立甲陵中学校 2年 小俣 拓也……………4
- 題名「私のクラスメイト」  
中央市立田富中学校 1年 嶋田 あおい……………5

### 佳作

- 小学生の部** 題名「笑顔いっぱい国タイ」  
富士吉田市立明見小学校 6年 広瀬 琳……………7
- ※題名無し  
笛吹市立石和北小学校 6年 笠井 陽向……………8
- 中学生の部** 題名「お互いを助け合う大切さ」  
甲府市立笛南中学校 2年 池谷 太我……………9
- 題名「必要とされてきた国際交流」  
甲府市立南西中学校 2年 清水 理央……………10

※作品は原文のまま掲載しております※

# 最 優 秀 賞

## 中学生の部 最優秀賞

### 「東京五輪の裏側で・・・」

甲府市立南西中学校 2年 清水 美遥

新型コロナの感染者数が増加している中、開催された東京オリンピックであったが、約二万人の選手が参加した。多くの選手たちが活躍する裏で、人の思いやりや、優しさを垣間見ることができた。その中で二つ紹介する。

一つ目は、スポーツを通しての外国人選手との繋がりが。様々な競技で団結や絆を感じた場面はいくつかあったが、特に印象に残った場面がある。スケートボードで日本人の選手が大技を決めようとして転倒してしまう。だが、その選手がコースから上がったところ、各国の選手が大勢駆け寄り、抱き合って健闘を称えていた。国を越えた選手たちの強い絆に感銘を受けた。言葉が通じ合えなくても、スポーツなど、何か共通したものを通して、外国人と繋がりを持てるのを感じた。私は吹奏楽部に所属し、サクソスを担当している。サクソスはジャズという音楽に使われ、世界中でたくさんのプレーヤーがいる。いつかサクソスを通して世界の色々な人と交流し、外国と友好な関係を築きたい。

二つ目は、外国人への日本の『おもてなし』だ。選手たちは新型コロナの影響で選手村以外は出歩いてはいけない、などの制限がかけられていた。コロナ禍でも来日してくれた外国人選手に向けて、日本のボランティアの方たちが、選手村の前で国旗や英語で「応援しています」と書かれたメッセージボードを掲げ、手を振って観迎していた。迎えられた選手からは「うれしかった」や「素晴らしい」という感動の声が上がった。他にも折り紙の鶴を贈ったり、帰国する選手たちをお見送りしたり、たくさんの心温まる日本人の気遣いや、心配りに感心した。『おもてなし』は、平安・室町時代に発祥した茶の湯から始まったと言われる、世界に誇れる昔からの日本文化だ。現在も新型コロナによって外国人と交流をするのは難しい。けれど、将来、外国人と直接会って交流する機会があれば、日本の『おもてなし』の心を常に持ち、「こんにちは」の挨拶や、折り紙といった自分にできる『おもてなし』をして、外国人を喜ばせたい。

東京オリンピックの裏側で外国との感慨深いことがあった。しかし、新型コロナが猛威を振るい、終息への光が見えず、外国との結びつきがなくなってきている。私たちと外国の繋がりを失わないために、リモートで外国人と会話してみたり、その国について調べてみたり、これから少しでも外国との繋がりを持つようにしたい。

**優 秀 賞**

## 中学生の部 優秀賞

### 「みんなでより良い世界をつくる」

北杜市立甲陵中学校 2年 小俣 拓也

貧困・水衛生・重労働・保健などの国際問題は、世界が抱える大きな課題だ。私たちにとっては他人事のように思えるが、世界全体でみると、九人に一人が飢餓で苦しみ、十人に一人が安全な水を確保できず、一億人以上の子供たちが不安定な生活環境下で、教育を受ける時間や費用がなく、体力も残らないほどの重労働をしているという。私がこの作文を書いている間も、世界では死と隣り合わせの過酷な生活をしている人がたくさんいるのである。私には、到底考えられない生活だ。また、これらの問題のいくつかは、最近よく耳にするSDGsにも取り上げられている。私たちとは決して無関係ではないということだ。

私は、今起きているこのような問題をなくさなければいけないと考えている。そして私は、貧しい環境にあり、まだ世界を知らない人との交流がしたい。国際交流というと、つい先進国を想像しがちだが、何不自由ない私たちとはかけ離れた環境で育った人々はきっと、まだ私たちの知らない価値観や世界を教えてくれるのではないかと思う。そしてこの世界のほうが、ずっと楽しく面白い。では、そんな世界を目指して私たちができることは何か。世代関係なく行える活動に、一人ではなくみんなで協力することで支援を行う活動がいくつかある。

私は今年の学園祭で小さなポーチを買った。実はこのポーチ、開発途上国の製品を適正な価格で買い取る事でその国の生産者の生活改善と自立を目指す、「フェアトレード商品」だ。そしてこれは、私にとって初めての自分のお小遣いでした海外協力だった。今までも個人や学校の取り組みで募金活動をしたことはあったが、全て母がその時のためにくれたお金だった。いざ商品を前にすると買うことにためらいを感じたが、思いきって買ったときには、ポーチだけでなく、お金では買うことのできない充実感と満足感も一緒についてきた。まだ支援活動を行ったことのない人にもぜひ、この感覚を味わってほしい。

協力で成り立つ活動が世界中の人に完璧に浸透しているとはまだ言いづらい。しかし、目の前に濁った水を飲み、やせ細った子供がいたら、みんなきっと手を差し伸べるに違いない。ただ自分たちとは遠い所に住んでいて、意識しづらいただけなのだ。大切なのはみんなでやること。普段の買い物でフェアトレードのものを買う、生活で出たはがきやペットボトルキャップを集めるなどの小さな活動も、みんなで協力し合えば、この問題の解決へぐっと近づくだろう。私たちが持っている力は、世界で苦しむ人たちにとってはとても大きな力だ。一人の力よりもみんなの力、ひとりのちょっとした活動が、積み積みって人々を救う大きな手となる。まずは、国を越えた協力のために社会がみんなで協力し合おう。そしていつか、世界中のみんなが楽しく、笑顔で暮らせる日を心から願う。

## 「私のクラスメイト」

中央市立田富中学校 1年 嶋田 あおい

私のクラスには、ポルトガル語しか話せない女の子がいます。私はポルトガル語を話すことが出来ないで、その子とあまり話すことが出来ず、とても残念に思うその子のことをなかなか知れずにいました。

ある日、私が朝登校するとその子は絵を描いていました。その子は少しだけ英語が話せると言っていたので

「素敵な絵だね。」

と英語で言いました。そしたらその子は笑ってくれました。簡単な英語でしたが、会話が出来たことがとてもうれしかったです。

私はその子と係活動が一緒です。その仕事の一つに、プリントを集めて先生に提出する事があります。プリントを提出する前に出席番号順に並べ変えます。この仕事を説明する際、私のきちんとした文になっているか分からない英語を理解してくれてとてもうれしかったし、次から次へと番号を探してくれて、一緒に探している自分もとても楽しくなりました。

私は、その子とそうじ分担も一緒に教室のぞうきんをしています。いつも積極的で、仲良しの友達が出来なくても進んでそうじをしています。私は、その子の進んで色々なことをする姿をとても尊敬しています。

私はその子ともっとお話しがたくて、今少しだけポルトガル語を勉強しています。ポルトガル語は日本語と少し発音などが違うので難しくまだ少しの単語が分かる程度ですが、勉強を頑張っ、いつかその子と会話出来るようになりたいです。

私が勉強しているのはポルトガル語だけではなく、学校の授業と習い事で英語を勉強していますし、独学で中国語の勉強も始めました。今はまだ日本語をふくむ4ヶ国語しか勉強していませんが、いつかもっとたくさんの国の言葉を勉強して、世界中の人とお話したり、友達を作ることが私の夢です。その夢を叶える第一歩が、その子と仲良くなることだと思います。なのでまずは、ポルトガル語の勉強を頑張りたいと思います。

まだその子のことは分からない事が多いです。ですが同じクラスの一員として、その子のことを少しでも多く知ることが出来ればいいなと思っています。そして逆に私の事も知ってもらい、仲良くなればいいなと思っています。

**佳 作**

## 小学生の部 佳作

### 「笑顔いっぱい国タイ」

富士吉田市立明見小学校 6年 広瀬 琳

私は、小学校低学年の頃、タイに住んでいました。その時心に残った、タイの良いところをいくつかしょうかいます。

電車でだれかから席をゆずってもらったことはありますか。日本の電車の席のきまりはお年寄りや体の不自由な人、にんぷさんなどがゆう先とされています。けれどもタイは、電車の席を笑顔で子どもにゆずってくれるやさしく、笑顔いっぱいの国でした。

タイの日本人学校では、ほとんどの人がバス通学をしていました。バス一台につき一人、「モニターさん」という私たち児童を助けてくれる人がいます。ある日、私のとなりにいた友達がバスよいでとつ然はいてしまいました。私はびっくりし、おどおどしただけで何もできませんでしたが、モニターさんは、

「ダイジョウブ？」

と声をかけたり背中をさすって助けていました。次の日には友達もすっかり元気になり、

「コップンカー」

日本語で「ありがとう」とお礼を言っていました。友達も私も、自然に笑うことができました。モニターさんはとてもやさしい人でした。この日から、バスの中で何かあってもモニターさんがいると思うと安心できました。

次に、タクシーの運転手さんとマンションの警備員さんの行動で、やさしいなと思ったことがあります。その日は、すぐ下の妹が家の中で骨折をしまいお母さんはあせり病院へ行くためタクシーに乗ろうとしましたが、お母さんは一番小さい妹をだっこしてたので、骨折した妹を乗せられませんでした。そんな私たちをみて警備員さんは妹をだっこして乗せてくれました。タクシーの運転手さんは急いで、病院まで連れていってくれました。お父さんの会社はとても遠かったので、すぐには帰ってこれませんでした。身近な人が骨折をしたのが初めてだったので、とても不安でこわかったけど、やさしい人たちに助けてもらい、病院についた時には、とても安心したことを今でも覚えています。

私も、タイの人のように心がやさしい人になって他の人を笑顔にして笑顔の花をさかせたいです。そして、なつかしいタイにもう一度、行きたいです。

## ※題名なし

笛吹市立石和北小学校 6年 笠井 陽向

去年のクリスマスイブの事、駅でぼくが飲み物を買っていたところ、外国人が十円玉を落したのを見ました。ぼくはとっさに拾って、声をかけようとしたのですが、何と声をかけたら良いのかわからず言葉が出てきませんでした。でも何とか勇気を出してしゃべったのは、「あ、あの一」と何故かカタコトの日本語でした。

最初、その男性は、戸惑っているように思えました。ぼくは「you」と言うのが精一杯でジェスチャーで十円玉を落したことを伝えました。すると、その男性は、状況を理解して、自分が十円玉を落したことをわかってくれたようでした。

その男性が子供のぼくの伝えたいことを分かってくれたから良かったものの、そうでなかったらどうなっていたか、もっとわかりやすく丁寧に伝える方法はなかったのか、ぼくは考えこみました。

戸惑っている男性を見て、ぼくが英語で話せたら、男性にとってもっと気軽なコミュニケーションになったのかなと思いました。

ぼくの家では、幼稚園の時からいろいろな国の人が家にホームステイをしに来ていました。だから、ぼくの中では、外国の人とオドオドしないで話せると思ったけれど、今回の出来事で、いきなり外国の人と話すとなると言葉がわからず戸惑ってしまうことがわかりました。しかし、ジェスチャーなどを使えば外国の人ともわかり合える事を知っていました。幼稚園の時も言葉は通じないけれど、なぜか気持ちが通じて楽しく過ごすことができたからです。

例えば、日本料理を食べて一緒に美味しいと感じたり、一緒に打ち上げ花火を見てきれいと感じたりしました。

中でも、インドネシアの人は宗教や文化で頭を布で隠していたり、ぼくたちと同じものが食べられなかったり、どんな時でも一日に何回もおいのりをしていました。

ぼくは、「大変だなあ」とか「何で何回もおいのりするの?」とか思いましたが、「ぼくたちにも他の国から見たら不思議な行動があるのかな?」と思いました。

ぼくは、この経験から、お互いのことを理解していくことで、いろんな国の人が心のかべをなくして平和に暮らすことができると思いました。

例えば、今、オリンピックが行われていますが、ベラルーシ代表選手が、ポーランドに亡命を希望しました。もし帰国すれば、政権からの弾圧で迫害を受けるおそれがありました。弾圧とは権力者が圧をかけおさえつけることです。弾圧を行なう事はお互いを理解し合うではありません。どの国も平和で安心できる社会になるために、今、ぼくができることは色々な国の文化や宗教などを学んで理解することだと思っています。そして、次にも、外国の人と話す時にきん張しないように英語の勉強も努力したいです。

## 中学生の部 佳作

### 「お互いを助け合う大切さ」

甲府市立笛南中学校 2年 池谷 太我

僕は、世界中の暮らしや文化、食べ物を見たい。なぜなら、日本にはない文化を体験してみたいし、食べたことないものも食べてみたいからだ。そう思ったのはテレビで東京オリンピックを見た時だ。

二〇二一年七月二十三日の夜、東京オリンピックの開会式がテレビで放送されていた。開会式が始まってすぐに、各国の代表選手の人達が入場してくるシーンがあった。それを見て僕は国ごとに選手達の身長や髪型、肌の色が違うことに気づいた。世界には色々な人種の人がいることは知っていたが日本にいとあまり気づかないため、改めて実感することができた。それと同時に、体格や髪型が違うのであれば、国ごとに食べているものや日ごろ使っている道具にも違いがあるのではないかと思いつき段々日本以外の国の生活に興味を湧いてきた。そして自分が知らない海外の事を調べることにした。たくさんの国について調べてみると、米が主食じゃない国や一年中温暖な国、人がたくさんいる国など、それぞれの国に良い所があり、ますます現地に行きたくなった。でもそれとは逆に、一日三食ご飯を食べられない国や、他の国と対立し戦争をしている国もあり、僕達と同年の子達が毎日生死をさまよっているという事も世界中で起きていることを知った。ある日、いつものようにテレビでオリンピックをみていた。その時は陸上の男子走り高跳びを放送していた。決勝になると、一位争いの決着がつかず競技が長引いていた。カタールの選手とイタリアの選手の戦いだった。するとカタールの選手が大会側に、金メダルを二つももらえないかと提案したところ、大会側はそれを受け入れ、カタールの選手とイタリアの選手が手を取り合い、二人で栄光を分かち合っていた。これを見て、お互い一位の座を目指していたにも関わらずそれを二人で分かち合い、励ましている姿がとてもしっかり自分の目には映った。このように、国境なくお互いを助けることが大切なんだなと思った。世界中ではまだ戦争で苦しむ人がいたり、食べ物がなくて困っている人がたくさんいることを理解して、募金や使わなくなった服の寄付などの積極的なボランティア活動をすることで、小さな国の助け合いをすることができる。ボランティア活動はもちろん社会で暮らしていく中で、バスの席をゆずってあげたり、落ちているもの拾ってあげるなどの小さな優しさでも助かる人がいる。だから小さなことでも毎日続けてやっていきたい。

人は人を支え合っていていく。困っている人がいたら助けるし、自分が困っていたり不安をかかえていたりしたら必ず誰かが自分を助けてくれると思う。だから、日々色々な人達に感謝をしながら生きていきたい。

## 「必要とされてきた国際交流」

甲府市立南西中学校 2年 清水 理央

国と国の間で一番大きくて、皆が楽しみにした数年に一度の大会はオリンピック・パラリンピックです。各国の選手が金メダルを取って帰るために何年も前から練習をします。そして勝ちとった選手をみて皆が感動し、人々は盛り上がります。そうすることにより人々は、平和の幸せと努力・協力の大切さを学んできました。

東京オリンピックがあるはずだった二〇二〇年からコロナウイルスの影響で、二〇二一年に延期されてしまいました。「中止してパリオリンピックを待った方が良い。」や「国民に感染者が多い日本に行くには無理がある。」など多くの意見が出されていました。しかし、無観客での大会開始とされました。観客がいない中でも選手一人一人が全力を出しきり、日本人でも金メダルをとりました。テレビの中から伝わってくる喜びと涙に感動しました。ある選手が「この金メダルが重いのは、これまでの努力の重さだからだと思います。」と言っていました。私はそんな言葉を言ったことはありません。でもオリンピックに出たから心からそう思えるのだと思います。

偶然、テレビのチャンネルを回していたら卓球の水谷選手と伊藤選手ペアが金メダルをとるところを見ました。二人は小さい頃から仲が良かったそうです。中国を倒して金メダルをとるのが二人の夢でした。努力・協力・本気で望むことが完璧だと夢を叶えることができることを見せつけられました。

始め敵だった相手でも事が済めば仲間になっていることもあります。励まし合っていることがあります。見た目や考え方、言語、性格、好きなものや嫌いなものは違って争い合うことがあるのは仕方ないのかもしれないです。でも、一人一人にそれぞれの理由があります。どちらが悪いかを定めるためにルールがあるのではなく、皆が楽しく過ごすためにルールがあるように、選手とどれだけ差をつけられるかを確かめるためにオリンピックがあるのではなく、練習の成果を出して他の選手とたたえ合うためのオリンピックだと思います。だから、人々は感動したり応援したりするのだと思います。それが平和で、この世界にもっと求められている事です。国と国との関わりが時に人々を苦しめる事もあるけれど、人を笑顔にできることもあります。努力は自分を磨けます。協力は誰かと団結できます。その能力を私も身につけられるように生きていきたいです。



**第34回（令和3年度）**  
**「国際交流・国際理解のための小中学生による作文コンクール」**  
**優 秀 作 品 集**

令和4年1月 発行

発行者：公益財団法人小佐野記念財団  
山梨県甲府市丸の内一丁目6-1  
(山梨県知事政策局国際戦略グループ内)  
TEL055(223)1435